

せっかち 園長の ひといごと

2016、1、29

認定こども園あかみ幼稚園・メイプルキッズ 統括園長 中山昌樹

新しい年になって1ヶ月、遅ればせながら、今年もよろしくお願ひします。

新しいこの年が、子どもたち、そしてご家族の皆様の、幸せに満ちた1年になることを願ひます。

認定こども園メイプルキッズ・あかみ幼稚園が一つの拠点となり、「子どもが一緒の生活って、時々大変なこともあるけれど、やっぱり良いな」と、感じていただけたら幸いです。私たち教職員一同も、心を新たに、子どもたちと保育を楽しみたいと思ひます。

DVDの 2作目が完成しました！

以前お伝えしたことがあります、本園を舞台に、東京家政大学の増田教授の監修のもと、『21世紀型の保育実践』という教材用の映画が作成されていて、この度1作目「遊び保育の実践」に引き続き、2作目「協働する保育～保護者・地域と共に」が完成し販売が始まりました。

この映画（DVD）が、大学や専門学校等で、これから保育者になろうとする学生たちの役に立つことを願ひます。また何らかの形で、本園の保護者の皆さんにも見ていただける場（自由参加）も作りたいと考えています。その際は、改めてご案内するので、ぜひご参加ください。

2作目「協働する保育～保護者・地域と共に」の内容↓

MENU

- ・認定こども園に移行した理由
- ・インタビュー1「新制度と協働の繋がりについて」
- ・保護者と共に取り組む『協働』する保育
- ・保護者が安心して子育てを楽しむための支援
- ・在園児の保護者だけでなく地域の人々に開かれた支援
- ・地域コミュニティの再構築
- ・インタビュー2「協働する保育への取り組み」

なお、この映画は3部作となる予定で、3作目は「生活編（仮称）」。

生活編（案）

1. 0歳—2歳・・・生活・暮らしの確立
2. 3歳—5歳・・・生活・暮らしの自立・・・『遊び』とのつながり（ex.粘土：指先の育ち）
3. 長時間への配慮（おもに0・1歳）
4. 多様な保育時間（短時間と長時間）への対応・・・2歳—5歳
5. 保育経験の違いに対する配慮・・・とくに3歳（新入と進級）
6. 生活・暮らしの視覚化（自立・・・ユニバーサル）
7. 生活・暮らしの「質感」へのこだわり
8. 生活・暮らしと「地域」・・・地域コミュニティの再構築

以下に紹介するのは、「保育ナビ」4月号（フレーベル館）。



※写真は本文の内容と関係ありません。

だきたいが、例えば、保護者支援ではこんなことをしている。

認定こども園の大きな課題の1つは幼稚園タイプ（1号認定）の子どもの保護者と、保育所タイプ（2号、3号認定）の保護者とが、会や園の行事の手伝いなどに参加できる条件が大きく異なっているということだ。会の時間を合わせることも1つでも大変だ。

そこで、あかみ幼稚園では、どの保護者も自分の日程の都合に合わせて園の行事などに参加できるような制度をつくった。1号認定の子の保護者は2号、3号認定の子の保護者がそんなに時間が取れないことはわかっている。でもだからといって、1号認定の子の保護者だけであれこれ進めてはおかしくなる。そこで、3歳児以上の子の保護者は、だれもが子どもたちのために何かをしてもらう、例外はつくらないということを決めた。でも条件がそれぞれ違うから、各人が自分の都合のつく時間に参加すればよいという

「サポート係」という制度をつくった。サポート係は、自分の都合のつく時間に、草むしりや絵本修理などを手伝う。これをだれもがするわけだ。

興味深いのは、園内に「子育てママカフェ」(リードット)というカフェを別棟でつくり、そこがカフェやリサイクルショップ、気軽なたまり場等として運営されていることだ。この運営も保護者が自発的に、保護者の側の責任で行っている。さらに、自主グループ(サークル)をつくり、畑をつくったり、アートめぐりをしたり、アフリカの音楽や文化にふれる活動をしている。ほかにもあるのだが、総じて、あかみ幼稚園の保護者は、園に子どもを預けることによって、人間関係の面でも、文化的行事への参加の面でも、育児協働の面でも、それ以前よりも豊かになり、役立ち感や親としての喜びなどを無理なく手に入れていく。これは21世紀型の幼児教育施設の歩むべき有力な方向を示している。ぜひ参考にしてほしい。

汐見稔幸
本音エッセイ

地域の中の園 これからの姿

あなたの園は地域で存在感を出せていますか？
2016年度は、地域の中の園のありようについて考えます。



執筆 汐見稔幸
(白鴎学園大学 学長)

園を21世紀バージョンへ

新制度が始まった。21世紀前半の日本は、現実には子どもの数がさらに減っていく可能性が高い社会で、しかも、高齢化が深刻化する社会でもある。出生率が1・4前後を続けていくと、2055年頃にはいちばん人口の多い世代が84歳になるといわれる。75歳以上が2000万人もいるのに、毎年生まれる子どもは50万人以下。小学生以下の子どもが1000万人に満たないのに、75歳以上の高齢者はその2倍も3倍もいる社会になる。

そうした時代に、どうすればどの世代も元気で生き生き生きていくことができるのだろうか。その拠点はどこになるのだろうか。これからの幼稚園、保育所、認定こども園は、そういう中でどういう役割を果たしていけばいいのだろうか。

そうしたことを考えて園の新しいあり方を懸命に模索しているところがたくさん出てきている。その1つが、栃木県佐野市にある認定こども園あかみ

幼稚園だ。

園長の中山昌樹さんは、どういう園をつくらうよいか、若い頃からあちこちに出かけ、実際に保育も体験し、模索してきた人だ。イスラエルのキブツに行っていたこともある。横浜の有名な幼稚園で働いていたこともある。最近ではイギリスのチルドレンズ・センターを見学していただく感動も返ってきた。そして、自分もこの日本に日本版のチルドレンズ・センターをつくりたいと動きだした。

チルドレンズ・センターの大事なミッションの1つは、保護者支援を本格的にすることにあるが、もっとというと、園が地域で子どもを育てている人にとってなくてはならない拠点になっていくことだ。

あかみ幼稚園は、そうした願いを少しずつ形にしている点で学ぶことが多い。詳しくは、中山さんが自園の実践をわかりやすくまとめた「認定こども園がわかる本」(風鳴舎)を読んでいた

前ページの記事は、やはり本園が舞台となった『認定こども園がわかる本』と一緒に作った、汐見稔幸先生のコラムです。

キーワードは、「**これからの・・・**」あるいは「**21世紀・・・**」ですね。

その意味からすると、上で紹介した教材映画（DVD.）のタイトルが、やはり『**21世紀型の保育実践**』というのは、偶然ではありません。

そこでの保育・教育は、21世紀になる前も後も（これからも）、変わらずに「遊び保育」が基本となりますが、園が親・保護者や地域とどう向き合うのかということが、昭和の時代と平成の今では違うと言えるでしょう。どうということかと言うと、「**これからの・・・**」そして「**21世紀・・・**」では、私たちはお子さんの保育・教育に努力するだけでなく、皆さんが安心して、お子さんの園生活や皆さん自身の子育てを楽しめるよう、バックアップする必要がある、ということです。

昭和の時代では、子ども同士のケンカやトラブルに、親・保護者が関わることは、あまりありませんでした。逆に、そこに口を出す親がたまにいと、「子どものケンカに親は出るな」と悪口を言われたくらいです。

しかし、平成の今では話が違います。園から親に報告がなくても、子どもが大きくなると「〇〇ちゃんにやられた」などと聞くこともあり、親の中では、どの子が“いじめっ子”かということが話題にもなります。

そのような状況で今の世の中、「子どものケンカに親は出るな」を貫くことは大変なことだし、我が子が関係したケンカやトラブルを知らないと、悪気はないけれど、やはり大変なことになってしまいます。「あの親は常識がない」「一言、『この間はうちの子がゴメンね』が言えないのか」など、それこそ悪口を言われてしまうからです。

そのため本園でも、子ども同士のケンカやトラブルを両方のご家庭にお伝えするという方針に、時間をかけて、段階を踏んで変わってきたことは、すでにお手紙等でお伝えした通りです。

しかし、0歳や1歳の小さい子どもの場合、意図的なケンカやトラブルはほとんどない。偶然にぶつかったり、生理的な原因（例えば眠い）から手が出てしまったということが多いことから、今年度に入り、“両方のご家庭にお伝えする”ということを再検討しています（0・1歳の場合のみです）。

一方さらに、これからはもっと、親同士（両方のご家庭）の間に園が入り、お互いの思いや気持ちがちゃんと伝わるような場を作るよう、サポートする必要もあると感じています。

今の子育ては、大変・・・

先ほど上で紹介した汐見先生がよく言います・・・今の親たちは、上の世代からは「今どきの親は楽してる、根性がない」「今は昔と違って、洗濯や食事など家事が簡単になり、子どもを預けることも楽なのに」と言われるが、今ほど子育てが孤独で大変な時代はない！と。下に紹介するのは、ある著名な園長と私が、ある勉強会で議論した内容の一部です。

利用調整（保育園等の場合で、市が入園先を決めること）では・・・

『オムツを金曜日から月曜日まで変えてもらっていないような子が園に来ることになる。』（著名な園長）→『その子をどう救うのか？何らかその親子に働きかけて「地域」で子育ての質を上げたいと思う。』（私）→『「地域」と言うなら、そこに多様な保育施設があればいい。どの園を選ぶかは、その親が決めるのがいい。』（著名な園長）→『その親が親心を育むような園を選ばず、結果その園で救われなくても、それはその親の自己責任ということか？』（私）→『その通りだ。』（著名な園長）

たしかに『園と波長の合う親が子どもをその園に入園させた方がいい。』（著名な園長）
 というのは、「理念」の共有という意味で一理あると思います。しかし、自分の城を作って、（そこに高額な保育料を設定して）、自分の城だけ守るみたいな私立幼稚園の発想は、もう過去のものだと思いました。



少し前の新聞ですが・・・

「ヒマ、ピンボー、オテツダイ」・・・これがすべてだとは思いませんが、
 「日本の親は子どもに『物』や『予定』を与えすぎている」というのを読んで、
 私は、たしかに、今の子どもは忙しそうだなと思いました。

自立も大事ですが、小さい時は思いっきり甘えさせるのも大切だし（「愛着形成」）。
 やはり私は、子どもには、もっと、まとまった時間が必要だと思いますね。
 思いっきり遊べて、時には、ケンカや試行錯誤（失敗）もして・・・。

皆さんは、どう考えますか？ 右の記事は、読売新聞（去年の12月20日版）。

2015年12月20日 読売新聞

日曜の朝に

ももすくクリスマス。サ
 ンタからのプレゼントを乗
 しみにしている子どもも多
 いだろう。

7歳になる我が娘も例外
 ではないのだが、いき「何
 が欲しい？」と聞かれると、
 あまり思いつかない様子。
 1月初めに誕生日を迎える
 ため、毎年、正月をまたい
 でプレゼントやお年玉の
 攻勢を受けている。本
 もももちや文具もすでに
 十分そろっており、「どう
 しても手に入れない」物が

ないのだ。
 そんな折、娘と同年の
 男の子がいるAさんから興
 味深い話を聞いた。
 家の方針でゲーム機を買
 ってもらえないことに不満
 をぶちまけた息子に対し、

子に物を与え過ぎない

Aさんが「自分でお金を稼
 ぎ、お金の時間を自分で普
 理できるようにしたら、
 好きなものを買いなさい」と
 諭した。すると、息子が
 「僕は18歳で家を出ると
 自立に向けた10年計画を立
 て、自分の服を自分で洗濯

し始めたという。
 Aさんの家では、クリス
 マスプレゼントは水筒や靴
 など実用品が中心。おもち
 ゃは「みんなで遊べる」環
 われたら自分で修理できる」
 などの条件に合うものを与

子どもの自立を促すと指摘し
 ている。Aさんの子育ては、
 その好例だと言える。
 バンダイの調査による
 と、今年のクリスマスプレ
 ザントが「1万円以上」と
 答えた親が全体の2割を超
 えた。自分たちが小さい頃
 に比べて高価な物を与えて
 いる、と感じる親は私だけ
 ではないだろう。

さっそく、我が家もAさ
 んに見習って「与え過ぎ」
 を改めようか。いや、孫の
 喜ぶ顔見たさにプレゼント
 選びに頭を悩ませている我
 が両親を見る限り、方針転
 換は容易ではないだろう。
 （森谷直子）